

2020年度 こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園 自己評価・学校関係者評価

◀ こどもの木かけ・野のはな空のとり保育園の自己評価

評価日：2021年2月19日

1. 基本理念・保育方針

<p>■こどもの木かけ 2002 基本理念</p> <p>『汝らは、地の塩、世の光である』 (マタイによる福音書5章第13節—14節)</p> <p>キリスト教の愛の精神を基とし、幼な子が、自ら生きる力を高め、豊かな個性を育むことをめざしています。こどもの木かけ(玉成幼稚園・野のはな空のとり保育園)では、0歳から就学まで一貫した保育方針にもとづき子どもの育ちに取り組んでいます。</p>	<p>■ 野のはな空のとり保育園 保育方針</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個々の子どものリズムに配慮し、動的な生活空間・静的な生活空間を考えた保育環境を提供し、能動的な活動を育てていきます。 ・人の成長・発達の基礎ともなる、さまざまな場面や状況を受けとめたり人からの働きかけを受け入れたりする『うけいれる力』を育てます。 ・自発的に試行しながら自らの取り組みを確かめられる『とりくむ力』を育てます。 ・「もの」「ひと」「じぶん」の相互の関係を意識して生活世界に働きかけられるように『むかう力』を高めています。
--	--

こんな子どもに育ってほしい…アルウィン学園のめざす子ども像

<p>①生きる力の礎である「自らの力で探求し判断しながら人とかかわりをとおした生きる喜びや自己表現が達成」できるように</p> <p>②「ひとりひとりが違ってよい」興味や得意なことを伸ばし個性豊かになれるように</p> <p>③あそびをとおして感性や知的能力・創造性・社会性を体得できるように</p>
--

すべては環境から

<p>子どもが主体的・自発的にあそび、学ぶために不可欠な環境構成は、心地よく過ごし、生活し、あそぶ「空間(場所)」環境と、充分にあそび、休息する充実した「時間」の環境、質と量が配慮された遊具や本物・良質な家具や調度品といった「もの(道具)」の環境が基本的条件であり、これらをうまく組み合わせてあそびを支えるのが保育者の役割です。同時に子どもとの豊かで温かなかかわりも重要なことです。保育者がこうしたかかわり高めるための人的な環境の一部でもあるのです。</p>

2. 活動状況と自己評価

【 基本的事項 】 中期的計画目標 (こどもの木かけ共通)

<p>◆子どもたちが、自らの力で取り組む姿勢が育ち、周囲とのかかわりを高め、育ちあえているか</p> <p>各クラスの間の施設された扉は、子どもたちの自律の力を信じることの妨げだったが、思い切って開放してみると、子どもたちは他のクラスにいる大好きなおとなの姿をみて満足した後は自分の部屋に戻っていき、混乱が起きる不安は杞憂だった。自分の属するところがわかり、興味関心から来る探索が許され、ひととのかかわりを広げることができ、子どもの中の自律は信じることから育っていくことを実感できた。</p>

<p>◆子どもたちに豊かな感性が育つようなとりくみや自発的なあそびをとりくめるように保育をおこなってきたか</p> <p>1歳児の保育室は、動線が長く交差しがちで、コーナー作りも難しく、単調な構成になるなど、保育園開設以来の課題となっていた。今年度の環境プロジェクトではこの空間をどうすれば子どもの自発的な遊びにつながれるか、一年通して知恵を出しあってきた。コロナ対策のため食事コーナーのスペースを従来より広くとる必要もあり、“今までと違う”ことが求められたことで、結果的に過去の構成に囚われない空間作りができた。子どもも新鮮な気持ちで好きなあそびに熱中してとりくむことができた。</p>

【 事業計画…とりくみの重点課題 】 短期的計画目標 (事業計画に照らして)

<p>◆保育の「可視化」を前進させることから保育の質向上につなげる</p> <p>保育の見える化は、今の保育界で共通した課題であり、奇しくもコロナの影響下でますます重要となった。とはいえ保育室のライブ映像の常時発信など、保育業界最先端のトレンドの路線ではなく、ドキュメンテーションやポートフォリオについて学び、まずは実践してみることにした。本来のドキュメンテーションとはどんなものであるべきかを学びつつ、手探りで自分たちなりに子どもたちの姿を伝えることで、自分たちの保育のあり方を見つめなおすことにもつながった。今後も継続し学んでいく。</p>

<p>◆保育実践の記述を根本的に学びなおし、保育の質向上につなげる</p> <p>二人称記述、エピソード記述を目指し、学び始めた。子どもと自分が1対1で向き合い、その子の気持ちに、とことんなりきって記録することは、これまでの三人称的な行動観察の記述に比べて、子どもの姿が記録を読んだ者の目に浮かぶようになるので保育の可視化にもつながる。当然保育の質向上にも直結することだが、まだ全員が意味を理解したとおりに記述を実践出来るには至っていない。日々の実践の積み重ねで身につけていくと思うので、今後も継続課題としたい。</p>

3. 今後の課題

【 中期的課題 】

中期的目標は、自らの力でとりくむ・自発的にあそびにとりくむ・周囲とのかかわりを高める・など、0・1・2歳の幼い子どもにとってかなり能動的な能力を要求しているが、それらはいくまで私たち保育者とのゆったりとした愛着関係が育まれ、安心できる心のゆとりの中から結果として少しずつ生まれてくるものである。保育の質向上を目指すあまり、子どもに何々をさせよう、と焦って「保育を回す」ということに陥ってはならない。また、知らず知らずのうちに結果を誘導・設定するような保育には決してならないように、自分や子どもを追い込まない心のゆとり・豊かさを失わないでいたい。

【 次年度の重点課題（事業計画） 】

保育の可視化と保育実践記述の学びは1年で達成できるものではなく、複数年継続して取り組み、確実に達成させたいと考えるので、次年度の事業計画も引き続きこの2点を取り組みの重点課題としたい。

◀ 運営委員会による学校関係者評価 ▶

1 評価項目の達成及びとりくみ状況について

コロナ禍にあって、感染対策や発症時の対応など、これまでにない保育状況での保育者の日常は、大変な緊張下にあったことと推察される。
取り組みの重点課題とした「保育の可視化」の成否を図る絶好の機会であり、まずは実践し、手探りでやってみることで、保育のあり方を見つめ直すことにもつながったと自己評価で高い評価が得られたことは、大人ではなく子どもの目線にたった取り組みをしてきた良さであると受け取れる。
各クラスの間で施錠された扉の開放を通して実感できた自律の助けや柔らかな感性の育ちを図った曲線の装飾、子どもの自由な発想の尊重などの取り組みが、今後につながるものと評価する。一方で、地域との連携の中で、保健センターからの情報共有の要請が増えたとの記述は、教育・福祉の観点から気懸りな点である。

2 今後とりくむ課題

子どもたちが自らの力で取り組む、周囲との関わりを高めるなどの保育目標に向けて、より具体的な保育プログラムとの突合せが必要と考えられる。
しかしながら、コロナ禍の現在「かかわり」の求め方が難しい状況にあり、園児同士、園児と保育者、保育者と保護者、保護者同士等の様々な関わりが、今後どのように形成されていくのか、これまでとは違った視点が必要と思われる。
保育の質の向上のために、二人称記述やエピソード記述を身に付け、記録を通して保育の可視化につなげる試みにも期待する。

3 総合所見

エッセンシャルワーカーとして、働く家庭を支える大変な状況下での先生方のふんばりが想像できる。子どもの居場所の存在が親の生活を支えるとの声もあるが、保育者自身の心と体の健康が大前提であり、保育の資質向上のための研修だけでなく、メンタルヘルスクエア等も必要である。
園だより（ぶどうの木、ぶどうの木の〈基〉、ひかりのこにじのへやだより）など、活動状況を日常的に発信していく積み重ねが、園に対する信頼等を支えていると思う。
なお、新しい「自己評価（園評価）チェックシート（案）」については、承認する。